

井上円了の『妖怪学』

序論

高橋直美

takahashi naomi

一、はじめに

井上円了の功績の一つに「妖怪」という呼称の一般化、及びその定義付けが挙げられる。『妖怪玄義』（明治二十年五月二日 哲學書院）第一段第一節に、「洋の東西を論ぜず、世の古今を問わず、宇宙物心の諸現象中、普通の道理をもつて解釈すべからざるものあり。これを妖怪といい、あるいは不思議と称す」と記して、今日では当然の如く使用されている「妖怪」の呼称及び定義を広めた。しかも、円了は「妖怪」を単なる呼称ではなく学術用語として広めたことに価値がある。

「妖怪」という語は、古くは、『朱子語類』（『靈魂不滅論』付録『靈魂集説』に記載）に「朱子云、人鬼之氣則消散而無矣、其消散亦有久速之異、人有不伏其死者、所以既死而此氣不散為妖為怪。」とある。

「妖怪」や「怪異」に類する言葉やその意味する対象物や内容は、時代や地域とともに変遷する。我々の祖先は、怪異現象及び信仰や禁忌の対象に「ある形」を与え、鬼・物の怪・怨霊・幽霊・白狐・古狸等と命名し、その存在や恐怖を具現化し、雷・台風・地震・津波等の自然現象を擬人化・形成化して信仰や禁忌の対象とした。「不思議なモノ」「畏怖するモノ」はそれぞれ、千変万化しながら脈々と人々の生活に息づいてきたのである。

例えば、「鬼」のように、魂魄の魄が死後地に帰らず、地上にさまよっている状態（キ）を指していたのが、いつの間にか「鬼門（丑寅）」と混同され、いつしか「於爾（オニ）」（隠〓オンが訛ってオニとなった）は牛のような角（丑）を生やし虎皮（寅）を身につけたという「仮の姿」を与えられるようになったなどがある。

このように、一つ一つの「コト」が「モノ」に遍歴しながら、今日認識されている「妖怪」の姿を形成していく（京極貞彦「モノ化するコト」東アジア怪異学会「怪異学の技法」臨川書店 平成十五年十一月）。

今日、妖怪といえ、鳥山石燕の『画图百鬼夜行』や竹原春泉の『繪本百物語』、水木しげるの漫画に登場する「不思議なモノ」を指すことばの代名詞として子供にまで広く知れ渡っている。もつとも、この種の妖怪の定義は、円了の説く「不思議」『怪異』『妖怪』の範疇からするとかなり限定的になつてしまっている。

平安時代の物の怪は体系が別であるので別格とするが、「化け物」としての妖怪は、江戸時代以降、絵師や戯作者によってその姿を人前に現す機会が急増する。

明治に入ってから妖怪は、嘶や絵本の世界から政治の場へも進出し、その勢力を増すことになる。明治四年九月十九日京都府は民間陰陽師を平民に編籍し、「妖怪の言を唱へ、諸人を狂惑候に付、巫相勤め候義」を堅く禁止し、近代的なアンシャンレジームを意味する語として「妖怪」が使用された（高木博志『近代天皇制の研究』校倉書房 一九九七年二月）。この場合の妖怪は「淫祠邪教・迷信の類」の意であり、京都そのものが平安時代から陰陽道等の呪術が存在していた魔都の代表のようなものであるからこのような内容はそれほど違和感がなかったのではないだろうか。

このような時代的な発想の中で、しかも妖怪を否定することなしに行われたのが、円了の妖怪研究であると西山克は「怪異のポリティクス」（前述『怪異学の技法』序論）で述べている。

二、時代と円了

不思議な現象に関する当時の新聞記事を見ると、「妖怪」という名称はほとんど使用されていないことがわかる。「モノ」であれば「怪物」「幽霊」「狐狸」等の個別をあらわす名称が普通で、石が降るなどという怪現象に關しては「不思議」と一括されていることが多いようである（『明治妖怪新聞』二〇〇三年二月『明治妖怪ニュース』二〇〇一年六月 湯本豪一編 柏書房）。

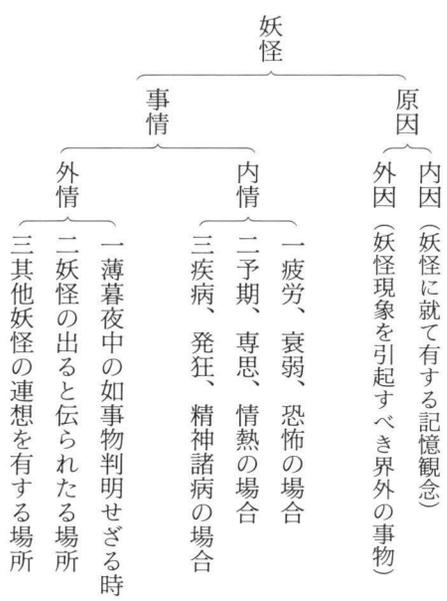
ところで、『明治妖怪新聞』『明治妖怪ニュース』中に、「妖怪」の語が明確に記されているものがみうけられる。山形県大瀬村の「妖怪探検談」（明治二九年八月二八日、二九日、三十日、九月一日、三日、四日、五日に亘り『東奥日報』に掲載）である。この報告文中には、

以上説明し来れる所の理に依りて該寺妖怪事件を勘定すれば、何人と雖も原因の内部にあることを知り得べきのみならず、従来伝はる所の経歴談も亦大概理解する事を得べきなり。然りと雖も我等の觀念は決して密なりと云ふを得ざるべく究數亦決して悉したりと云ふを得ず。只管井上円了文学博士が考定せられたる学説の一部に依りたるものなるを以て、余輩が説明或いは妥当を得ざるもの有るや計り難し。

（『東奥日報』明治二九年九月四日）

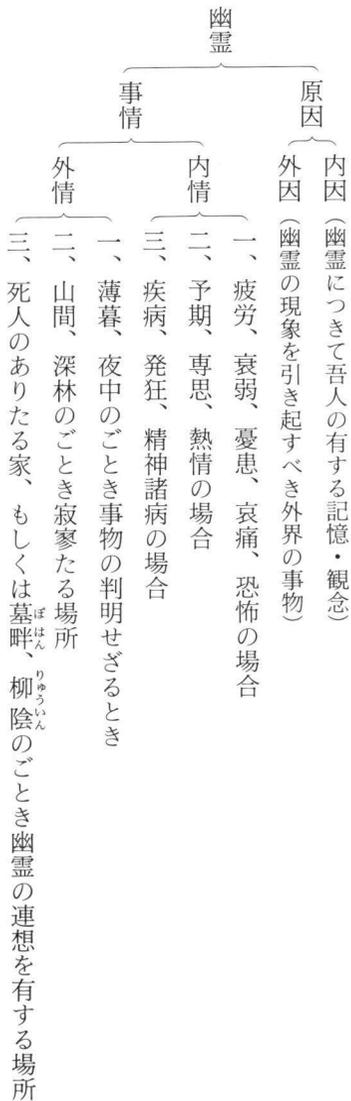
と記されている。探検者である報告者が円了の妖怪研究を手本としていたのであるから、「妖怪」という語が使用されて当然といえる。しかも、同九月一日の記事には、

余輩は該寺の妖怪事件に就ては必ず種々の原因及び事情あるものと認む。今之を掲ぐれば、



故に若し今後村民等にして彼妖怪に際会したる時は、必ず虚心平氣にて右の原因事情の外に真に妖怪と見認め得べき者有りや否を審定せんことを要す。然るに若此妖怪は此等の原因事情に依りてのみ成立するならば、余は愈々断じて狐狸の所業にあらずと云はんとす。(未完)

と記されているが、これは、円了の『迷信と宗教』第一四節(井上円了選集第二〇卷、三三九頁)、ゆえに余が目的は、今後の幽霊につきて注意を与うるにあり。まず、世人の幽霊に遭遇したるときは、必ず種々の原因及び事情あること記せざるべからず。



ゆえに、もし今後幽霊に際会したるときには、必ず虚心平気をもつて、右の原因、事情のほかに、真に幽霊と認めざるものあるかいなかを審定すべし。しかるに、もし幽霊がこれらの原因、事情によりてのみ成立するならば、余はこれを名づけて仮怪といわんとす。

とほほ同じである。図だけでなく、地の文までもが円了の幽霊説の本文と一致しているのである。

そして、この『迷信と宗教』は大正五年三月一八日が初版であることを考慮すると、この記事の執筆者は記事執筆の明治二九年八月にはすでに、円了のこの学説を知っていたことになるため、おそらくは円了の妖怪研究にかかわっていた人物であろうと推測される。

当時の怪事件に関する円了の人氣は、たとえば、明治二八年六月二六日「中国」の嫁に虐待され自殺した舅の亡霊の記事、「井上円了氏よ一度来広ありて実地探検ありては如何」、同三一年十一月二日「新愛知」の幽霊が写真に現れたと言う記事、「何れ円了博士の好材料にこそ」、同三六年四月一七日「函館公論」の割腹自殺者の幽霊

談「其真象を知るによしなしとは近頃不思議なる訳なるも、井上円了あうへんれう氏を聘せうじ来て篤とくと研究の上ならでは慥たかに夫れとは云い難しとは真か偽か……」とあるよう、かなり高かったようである。

又、当の円了自身にかかわる記事も、明治一七年八月一七日「日本立憲政黨新聞」に

怪物取調 此程の紙上に越後国三島郡浦村の井上円了なる人が加藤大学総理へ怪物の理取調方を依頼せしよしを記せしが、右は少々誤聞にて右井上氏は東本願寺派の僧にして東京大学の哲学第四年級の学生なるが、嘗て心理学等研究の爲め世間に謂いはゆる怪物等を実じつ檢けんせんと心掛け、加藤氏へも其事を談じ此夏季休暇を幸ひ其郷里越後は不思議の多き処に付、追々に之を實じつ檢けんせんと故らことに帰省せしにて、頃日は同地に名高き早取の怪物を見んと西蒲原郡に滞留中の由なり。

と掲載されている。

このような怪異関係の記事は、湯本豪一氏の「明治怪奇報道年表」(『明治妖怪新聞』)では明治五年から同三三年、同氏の「地方発明治怪奇報道年表」(『明治妖怪ニュース』)では明治九年から同三六年にわたってその記録が掲載されている。この時期は学制発布から日露戦争までの時期にあたり、日本が近代化に向けて尽力した時期と重なる。人は近代化が進めば進むほど反近代的なものに、科学が進めば進むほど非科学的なものに単なる反動としてだけでなく、人の心の闇をのぞくような怖さと興味をもつことがある。都会の光が明るければ明るいほど田舎の闇は暗く怪しく不思議に見える。この時期の日本は山村の闇が都会の繁栄や光との対比で前近代的なもの、自然にそなわっている畏怖すべき不思議なモノとして浮かび上がったのである。

そして、このような時代であったからこそ、「妖怪学」は世間の支持を得ることができた。

ただ、前述の如く当時の新聞に「怪物」「不思議」の語は見えるが、「妖怪」の語は使用されていない。

怪物取調

の記事で使用されている「怪物」とは、京極夏彦のことを借りれば、「モノ」化した「コト」（モノ化するコト）（前掲「モノ化するコト」）であり、今日一般に使用されている「姿・形」を持った「あやしいモノ」「不思議なモノ」「怪異なモノ」といえるだろう。（今日でも研究者の間では、「妖怪」や「怪異」に関しては、その概念や使用方法に検討の余地があるといわれている）。

このように、「妖怪」に関する円了の存在は大きく、しかもそれを学問体系としたことで、善くも（妖怪学を学問として体系化したとして）悪しくも（妖怪をてきとうな理屈で否定してしまったとして）今日の妖怪研究に多大な影響を与えているのである。

三、円了とその時代

明治十年に紹介されたスペンサーの社会進化論は、当時の思想界に大きな影響を与えた。明治の啓蒙思想の先駆者である「明六社」の知識人は、学問の発展を自然科学の発展に求め、進化論的発想を持った。中には加藤弘のように進化論を用いて仏教を批判するものもあったが、明治十年代前半に活躍したかなりの思想家は、啓蒙思想の影響から、欧米に遅れをとっている日本の「愚民社会」善導の発想、すなわち、愚民教化の啓蒙活動を目指した（『明治仏教教会・結社史の研究』池田俊英 刀水社 二〇〇〇年二月）。

それと並行して、仏教者たちの間にも仏教改革運動が起り、基督教排除論や西洋思想を用いた宗教論が盛んになる。その中心人物の一人が学僧・井上円了であり、その後、円了は当時の主流であった愚民教化を掲げて教育活動を展開していくことになる。

ところで、開明期の思想家で「明六社」の知識人・津田真道（一八二九〜一九〇三）は、その著「開化を進める

方法を論ず」(『明治啓蒙思想集』明治文学全集3 筑摩書房 一一七頁)で、「果シテ蓋国ノ人民ハ依然タル旧習ノ人ニシテ概シテ之ヲ言ヘバ地獄極楽因果応報五行方位等無根ノ説ニ迷ヘル愚民ナリ、豈之ヲ半開ノ民ト謂フコトヲ得ンヤ」と、愚民啓蒙の必要性を述べているが、ここに列挙されている、「地獄極楽因果応報五行方位等無根ノ説ニ迷ヘル」愚民とは、まさに円了が妖怪学を学ぶべき対象とした人々であった。円了は明治二十年に『真理金針』を著し、弱肉強食・優勝劣敗の進化論と理学(科学)的進化論(物質不滅・勢力恒存等)の発想を以て宗教を解釈しようとした。(前述『明治仏教教会・結社史の研究』)また、円了は二十年代の国粹主義的愛国心の流行には、護国愛理の精神をすべての根幹にすえるとしてこれに応じている。

円了の妖怪解釈が宗教同様、理学的・社会的進化論によっているのは周知のことである。また、円了の護国愛理も『妖怪学講義』(明治二十九年第三版 哲学館)緒言(『井上円了選集』第十六卷四四頁)には、

さきに妖怪研究に着手し、つぎに哲学館を創立し、つぎに専門科開設を發表し、今また『妖怪学講義』を世上に公にするは、みな護国愛理の二大目的を實行せんとするものにほかならず。妖怪の原理を究めて妖怪を排し真怪をあらわすは、真理を愛するの精神にもとづき、これを實際に應用して世人の迷苦をいやし世教の改進をはかるは、国家を護するの衷情にもとづく。

とあり、妖怪学は護国愛理のためであることが主張されている。また、『迷信と宗教』第六一段(一)妖怪学と諸学との関係の冒頭においては、「ヤソ教者は神をもって全知全能の体となすも、余は妖怪学をもって全知全能の学となす。なんととなれば、妖怪学は万学に關係し、これを研究するには万学に通ずるを要すればなり」と記して、諸学に通ずる「万学の基礎」である妖怪学を啓蒙すべき必要性を力説しているのである。

このように、円了は妖怪学を一つの学問としてとらえ、近代的な学術的な分類をこころみている。『妖怪学講

義』を見てみると、

妖怪学講義

第一類 総論

第二類 理学部門

第三類 医学部門

第四類 純粹哲学部門

第五類 心理学部門

第六類 宗教学部門

第七類 教育学部門

第八類 雑部門

と分類し、妖怪学は応用学であるため、諸学科に当てはめて説明され得るとしている。さらに、妖怪総体の大分類（『井上円了選集』第一六卷 一〇九頁）、心理作用における常・変（同書二〇八頁）、妖怪（偽怪と実怪）の分類（同書二〇九頁）等と分かりやすく表に纏め、一つの学問体系として形成しようとした。

そして、その説明は宗教論同様、合理主義・実証主義的方法で行われており、円了の得意とする哲学や、心理学、理学を余すところなく活用している。つまり、自己の知り得る知識をもつて全てを説明しようと努力しているのである。

円了は前掲『妖怪学講義』の序で、

今やわが国、海に輪船あり、陸に鐵路あり。電信、電灯、全国に普及し、これを数十年の往時に比するに、

全く別世界を開くを覚ゆ。国民のこれによりて得るところの便益、実に夥多なりといふべし。ただうらむらくは、諸学の応用いまだ尽くさざるところありて、愚民なお依然として迷裏に彷徨し、苦中に呻吟する者多きを。これ余がかつて、今日の文明は有形上器械的の進歩にして、無形上精神的の發達にあらずといふゆえなり。もし、この愚民の心地に諸学の鐵路を架し、知識の電灯を点ずるに至らば、はじめて明治の偉業全く成功すといふべし。しかして、この目的を達するは、実に諸学の応用、なかならず妖怪学の講究なり。

〔井上円了選集第一六卷〕一九頁〜二十頁〕

と述べている。この文章を読む限り、円了の講義する妖怪学とは、文明の利器を手にすることで生活改善をはかろう、精神面で近代化を図るためのものであり、妖怪の理念を追求しながら学問的深化をはかるといふものではないように思われる。文中の輪船や鉄道は「理学」を用いてより良い生活のための知識の応用として例示されたものであり、理論そのものではない。

当時、日本人の生活を西洋式に改善しようとした人物に、円了の漢学の師・石黒忠憲がいた。石黒は麦飯で脚気が治るといふ説を、森林太郎（鷗外）とともに日本の迷信として一蹴するような西洋医学一辺倒の軍医であった（円了を文部省に紹介したのも石黒である）。石黒は生活改善運動家として、後進国日本を欧米並みの生活レベルにひき上げようと努力した。円了同様彼らもまた、日本の因習を破り、近代的市民層を育てようとしたのである。

池田俊英氏は『明治仏教教会・結社史の研究』（前述、二七〇頁）で円了について、

このような開明期知識人達の「教」と「学」との樹立の姿勢には、専門的知識の体得ということよりも、むしろ経政家的合理主義の立場から日本人の生活様式と思维方法の近代化に力点が置かれていたが、そこに

近代化の方途をみいだそうとする姿勢があつたのである。
と述べている。

前述のように、明治の啓蒙家は愚民思想をもつて社会改良を行おうと試みており、円了もまた「妖怪学」等から愚民思想の立場から社会改良を行おうとした。このことから円了は哲学者というよりも、むしろ時流にそくした愚民啓蒙家的教育者であつたといえるだろう。

妖怪学に代表されるように、円了は物事の真相を極めるといふよりは、むしろわかりやすい説明をもつて誤解（誤怪）による恐怖を解き、近代的な知識を人々にもたせようとした。つまり円了は真理の探究よりも、無知蒙昧な愚民に護国愛理の心を育み、近代的な考え方のできる国民を育てる教育に主眼を置いたのである。近代国家形成のために迷信やまじないを排して、科学的な知識を普及して、なかでも山村や農村など因習にとらわれ闇に埋もれた旧弊状態を文化的で健全な生活へと改善しようとした。これは新潟の農村に生育した自己の体験に根ざしたものが多分にあるのだろうと思われる。円了の宗教論・妖怪論に、合理主義に基づく「優勝劣敗」の進化的愚民観が潜んでいるのも、ここに理由があるのかもしれない。

このように円了の妖怪学は、善良な知識人たる市民の養成であつて、哲学者や科学者という専門家の養成ではなかつた。

今日、円了の妖怪学というと、妖怪の存在をすべて否定し、しかも、その証明のしかたがいい加減であるという批判をよく耳にする。当時、妖怪とは中央と異質なものの、支配層・市民層と異なるもの、すなわち非文化的で理解不可能なものとして人々に眉をひそめられていた。それが円了の妖怪である。妖怪は誤怪（誤解）であるため真の妖怪ではない。円了は真怪（真如）を極めるために妖怪を排斥したに過ぎない。しかし、妖怪を完全に否

定しきれていないために、かえって妖怪の存在や不思議さを強調してしまったのではないか、或いは、「妖怪」という「モノ」が現象から生み出された背景を全く考慮に入れていないのではないか等の批判も多々ある。しかしながら、円了の妖怪退治は前述の如く、あくまでも未開の生活や社会を開明・改善するために、諸学の応用を世間に教示しただけであり、また「真怪」を求めるために妖怪を否定するための「方便」であつた。ただ、「真怪」をきちんと追及・解明していないためによけいな混乱が生じたのではないだろうか。要するに円了は社会改良の先鋭的な啓蒙家だったのである。

そして、このような啓蒙家・円了の妖怪研究の姿勢は、彼の代表的な進化論・比較宗教論である『真理金針』続々編（明治二十年）第一節の終わり（井上円了選集 第三卷『二九六頁〜二九七頁』）にある、

ヤソ教の眞実ならざるゆえんは、左の諸点においてみるべし。

（第一） ヤソ教は陰証ありて陽証なし。

（第二） ヤソ教は理学実験の結果に合格せず。

（第三） ヤソ教は倫理の論理の原則に適合せず。

（第四） ヤソ教は進化の規則に背反す。

（第五） ヤソ教は心理の学則に背反す。

と類似している。

円了の「陽証」「理学実験」「進化の法則」は理学的進化論を用いての解明であり、「倫理」「心理」は哲学・心理学を用いての証明である。円了は主知主義的な合理主義をモットーにした、理学的・社会的進化論を武器にしたのである。円了のヤソ教に対する反論は、「妖怪学」の妖怪の正体を暴露する方法と同じであり、円了の一貫

した方法論となっている。

しかしながら、ヤソ教への反論がそうであるように、妖怪学においても、一つ一つの事象について詳細な研究や論及は行われていない。そのため、妖怪そのものの詳細かつ徹底的な解明がないため、後世の不評を買ってしまふ結果となった。このような視点・論点の違いから護国愛理の啓蒙家としての円了の立脚点を知ることができるとともに、彼の妖怪研究の限界をもうかがうことができるのではないだろうか。

【参考資料】

- 『井上円了選集 第三卷』東洋大学 一九八七年十月
『井上円了選集 第十六卷』東洋大学 一九九九年三月
『井上円了選集 第十九卷』東洋大学 二〇〇〇年三月
『井上円了選集 第二〇卷』東洋大学 二〇〇〇年四月
『井上円了選集 第十六卷』東洋大学 二〇〇一年五月
『明治仏教教会・結社史の研究』池田俊英 刀水社 一九九四年二月
『明治妖怪新聞』湯本豪一 柏書房株式会社 二〇〇三年二月(第三版)
『明治妖怪ニュース』湯本豪一 柏書房株式会社 二〇〇一年六月
『怪異学の技法』東アジア恠異学会 臨川書店 平成一五年十一月
『妖怪学入門』東洋大学井上円了記念学術センター編 株式会社すざわ書店 二〇〇〇年二月
『妖怪馬鹿』京極夏彦他 新潮社 二〇〇一年二月
『百鬼解読』多田克己 講談社 一九九九年十一月
『怪異の民俗学 妖怪』小松和彦編 河出書房新社 二〇〇〇年七月